

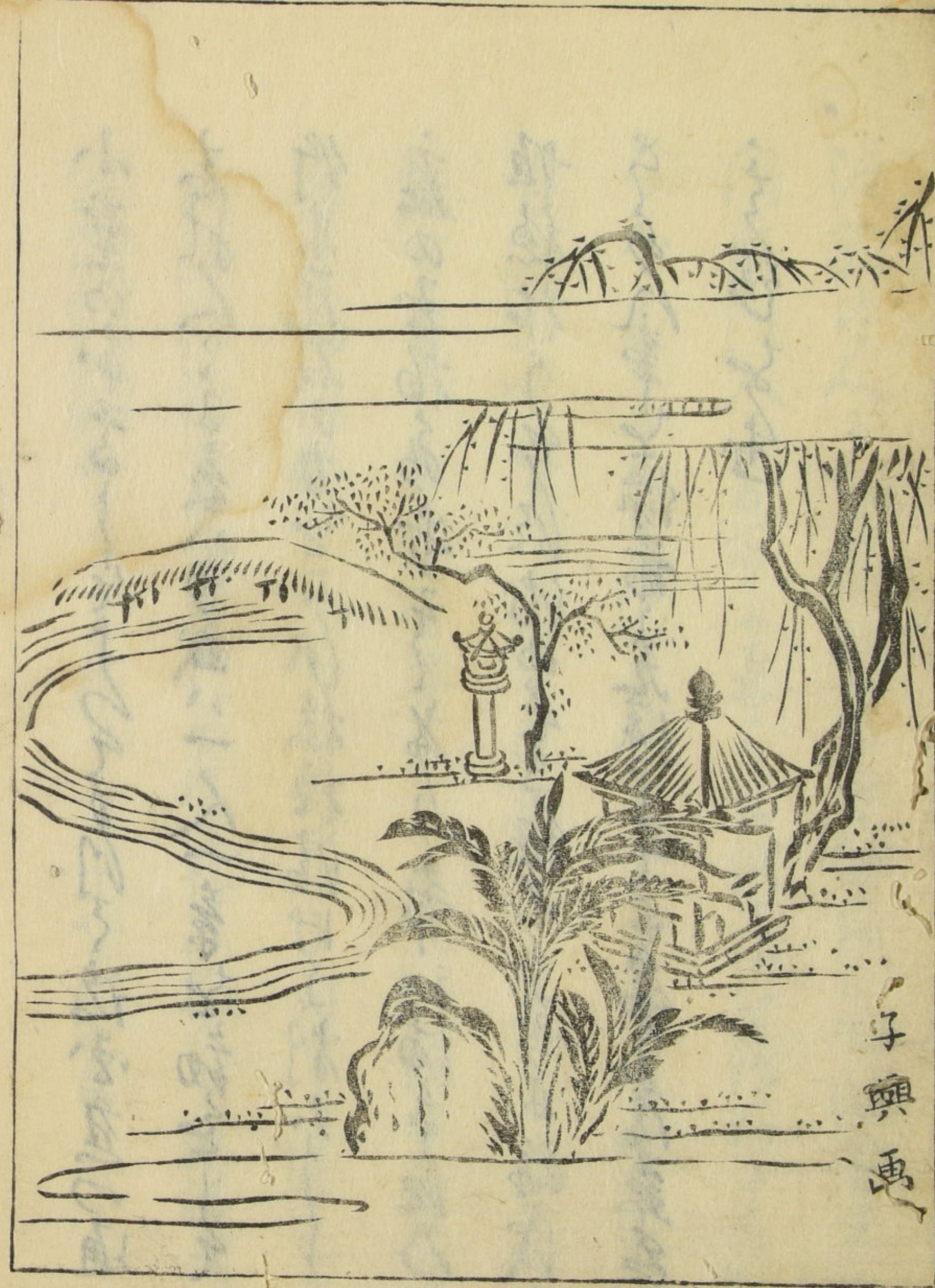


其城をささぐ月を無事とてさし
とういつれはうとよき清侯の御も
構と地を愛さうりむねく古地母に
彩る人こそぬく早うつり雲路ぬ
あそそふ松の早月夜集沾涼の江戸
砂子も色を居れ跡なく塚のまじり
うきうきうきうきうきうきうき
雛子あさうきうきうき保元文乃首

語ふして其はらむうき愛のわい
うきうきうきうきうきうき
ふけり翁れはれをさうきうき
編るうきうきうき乃田庵はれをさうき
保元七十年の冬百息を招きうき
塚を築木像を彫刻うき位牌堂に納
めし十月十二日八時をさうき
うきうき保元八年のうきうき

江戸の人々を始社中力を以て世に傳へ
門前に入る所を再々世に傳へて結成する
くふなるところをうけつゝあはれす
古来の心をもつて又物より一をいふ
親世青と本像を安置し作り親世を
おれぬ依佛より一を中におせし
後後継ぎて本堂をたむむのち
松村氏
松村桃庵八祖翁の
孫子松村傳幸の孫
のちを傳へる一をいふ

小堂の本堂よりつゞき法要を通
志し人々を教へる一人一を
竹本瓦石の力を以て松村氏に
庭の玉柏ありあり希い海に乃
垣植けしを以て池の水を根を
とめん事と像前より九洋一を
を傳へる



芭蕉菴地再興
竹末祠堂料寄進

江戸幕諸國社中

一 地飲

田口花明

一 芭蕉堂

天野巨龍
岡 龍

一 講具一式

赤岩
山崎瑞系

一 唐銅花瓶

市屋孝扇

一 唐物香臺

島村画鏡

一 芭蕉翁於十太才子画像額

男谷深松

一 垣圍一式

漸利書成

一 石碑

久江系龜求

若山子交

碑面

妙多作

地蔵寺

久江系

とて紙

雲ハ方池にわしとてあふれをて
 月の一朧花の清きものをのりて
 いふれ清光とあふくの

敬告店

晉成

名枚樓

每求

玉音

子文

深川親和七十二歳書

浪花

安井 國

雪堂社中

白井子牛

黃雅芳堂

中國乳器

義代必親

寺回松隣

卷五

橘井花水

唐中丞賊寄附所

再與

一芭蕉翁自画像二見歌文集

松村桃鏡

中東文集卷三集二集出

一芭蕉翁杜園友年記行一帖

森田白翹

一芭蕉翁六等尺書葉追悼白入紙物

吉中彦英吉

一芭蕉店之大字額

張江系松陰寺
遠藤和尚年

全

一芭蕉翁肖像石摺

石川幸元年

全

翁六等尺書の紙と加則芭蕉堂自画像の字あり
求と題——く店と施々

一埋板文藝并竹の硯箱

先師更定翁所持

全

一人丸手像一軸

恒川友為

一重硯

堀白門

一喜臨堂花生

射和祖山

一聯二枚

子親亭吐月

不辭葦酒入庵中

人の能をうけりふく水物つて唇をく秋の風
己う長秋候くふくれ

長秋虫

一四山瓢

檜庵六窓

四山

一瓢之集山

自笑稱々山

其書首陽山

遠中飯炊山

高橋源士素本を書

書

似合——の新年瓢茶を年々と以てし

芭蕉居士の遺言あり故ありと云ふは拙著より
今二條と稱するは是と書家龍水より一む
るところあり

右再興伝書明和八年卯四月廿日先師更定翁
十七回忌為追福執行之當日親音懺法辱所
祖業大和尚等大衆二十余僧供養於此法蓮
連丈負波山幸文來到者披露一方向無仍
出座懇連三百二十余衆

懷中く俳諧

取て牡丹を蓮のうへに置く

冬太

非時も新葉は香しき河のほとけ

井水

先師の傳授しき筆乃細く記す

班象

百頁余略く

賦何人俳諧く連歌

四隅より庭をくまなく巡りて

冬太

玉すくも芭蕉居士の遺言あり今一連丈

中しき事

一 句の事よりいふに、これあつてひひの
一 句の事よりいふに、これあつてひひの
一 句の事よりいふに、これあつてひひの
一 句の事よりいふに、これあつてひひの

右

卯四月

執事

毎月定金矢取

八日 十二日 廿八日

夢太評

月次爰台合

菴守

是離集

後之病と云ふは古史をうけしり此の如く
寛保二年十月二十回古祇社築き後宝暦
二年十月松村桃鏡立石

本下示庭

小堂

禪宗 白牛山東盛寺

寛保二年十月二十回古史中唐破笠彫刻の
肖像を安永九年可唐馬光子造立芭蕉林より委

本下示井井を不

古見塚

天仁宗 宝来山長今寺

いさしと云ふは古史をうけしり此の如く
名と云ふは宝暦二年十月古祇社門人祇庸
造立松村桃鏡補く

牛込園口氷川神社を不

小月面塚

禪宗

龍溪庵

いさしと云ふは古史をうけしり此の如く
埋く名と云ふは寛延二年八月夕可唐門人爲什
芬路造立

筆をうゝらゝめ張横渠を新葉をかくて
修学れ力とせしとなり平其二紙を次
そゝは陰丹抄ひく風面よりぬきやうれを
聖するのこ

表八章

花乃雲霧をよせられたるる	芭蕉翁
わけろふまは梅のそけひと	楚龍
志強うの茶瓶もあえる春風う	巨龍
うふの較村れおひまーは	吐江
あまのそをうりの梅ふまう	貢面
思ふむやふまをんれ禁割	名凍
葛の葉のさうーんせそ月乃家	熟我
うけそ祢うひの糸乃夕葉	か得

春水水女すゝ 志のいの殿より 壁より石れも 糸をうゝぬ子 使へ川榎れを このまひまゝ	一の舟は 既中めさす つふ香積小屋 破ぬ阿ふさ のあうき お撲ふれく	翁 松隣 楚水 玉斧 起石 西考 鳳宿 去納
---	---	---

春ぬや蟻の巣つゝ 朝おそろろ 夜あき山都 小粒を 何體も 今の うふふ又酒の 若くはふれ	小根乃漏 ちる比 二挺のさ 川齒より さらし む十六粒の のむ能を 若くは	翁 瑞系 怯車 鳴年 千丈 逸契 免明 依因
---	--	---

蛸よりハ海苔をも老の愛もせそ
 世を阿ハ若れ豈の志もく
 あさちふみ若れする泊将
 将をうりらせあそふ事
 見一のまゝそやぬ藝功紀
 節季師走の筈もさくく
 只ーいられと笑ふぬ若の月
 毎秋の漬涌乃何いのん
 翁
 鳳足
 足物
 龍丈
 桃稚
 美人
 和星
 桜言

ひくく忘れは横くや郭公
 若ふもくくみき乃筑波根
 孟々々袖ひくくりてあて
 物後くくみきーかーこまる
 けりよ系履ハかき理をくく
 秋の中ーきの結納移り出さ
 けいふくれ中垣らね月の高
 ちーあそ秋の風くはあり
 翁
 四國
 耳得
 長羽
 米汁
 根泉
 菜根
 奇峰

癸

子牛

夜光

張氏

鬼守

関牛

死
口

烟
香

翁

署成

如風

湖堂

蓬戶

魚尺

眠江

仙茶

芭蕉神分して鹽より面を穿ねけ
 子文
 をのく 起よ月ともある
 百頁
 例幣に傳馬掛ね秋乃事く
 尚義
 町子 引い流寺北門あ
 巴多
 去白と藤子より遠く医者ひり
 巴多
 ふさむ海ふとね叙母のことつそ
 巴多
 後一も梅津うつと枝ちうけを
 大斗
 うすを驚の候くんを驚
 車時西

義典の言を穿ねる事よ事悲い河
 翁
 み合えうりる酒もある月
 氣求
 世の中はまゝ十日菊の香よめて
 盤中
 江戸 踏くとも非ぬたま
 吏中
 笑うと茶と裏と背れ候ち
 系守
 子あはれまゝ一家ふゆい
 其附取
 育のなれ梅と雪と隙く
 菊平
 苗代風の候くんを驚り
 磐川

名月や門よりくさるはのしら
 おもいてくさるゆふの秋
 光とも月すくし扇よりひかげ多
 續くくさるし糸裳むくさる
 便服より芦投よりくさる
 葉家よりひくさる
 庭より小春よりくさる
 春のねねのくさる

翁
 乳峰
 夜梧
 子之
 赤月
 美人
 之思
 言表

起あつた菊ののちりぬのね
 隣りよりハナリ月乃やれり
 春をくさるし糸裳むくさる
 之くさるし糸裳むくさる
 そくさるし糸裳むくさる
 喜田れ南よりくさる
 或る者あるハナリトくさる
 祢よりくさる

翁
 春歩
 富屋
 長長
 倉前
 豊前
 令龜
 菅波

令展の松れ婦々さよきこりり	翁
大桶を中より取り出す女	白翅
百日れ醒りしおとに縁も出る	友路
おとあゝぬものゝ何く	竹條
精霊をりてなりし茶の香かう	士峯
おふりし時段乃新く勢	投茶
夜寝る妹を紙幣に籠より	和文
拙の〜しは教のさむし	玉峯



悪大けしきおんせん名丸け	翁
おとろ落つむし〜日す酒	白門
夜も既一妻鶴れさ来くみ	鬼秀
うは出仕の例もその〜	祇卜
おのり三白髪上格乃入〜	一茶
仔細ものうりうむやうか	葵也
咲つ〜る草いろくの屋の舟	元子
茶梅越く石〜乃家	祇之

年の市線香焚けいてるや那	菰
はるふ羽織も紙衣も杖	花明
旭々夕日よるれ新おちる	深松
涙とて、鰯の小刺さるゝ	牛家
いづれもよき物ありし神場を	斑石
うきとくも寝寝乃れ	祖山
存もて。越のちみれきやう	画賛
松より急居乃系う月かく	虚舟

四季

やゝあやめさるる海苔乃味	其角
秋風はるるさるぬ縄すさ	嵐雪
むつらりと岨の枯木もさるる	秋風
鴈の居るや市乃杭よ神年月	嵐茶
亭主のねるさるさるてふさ	百里
ある人よあさるさるてふさ	去来
市中や木の葉も落涙をなほ	桃隣
清水のさるさるさるる春れ月	許六

馬の耳を舐めてを——梨の至 支考
 大原や藤の如く露れから月 丈草
 を汐れ橋乃能さくうふれ月 利牛
 管や雑煮をさく里津成 尚白
 釜の月を舐めてを——門をさくなり 聖城
 奥店やむ——おとて冬乃月 里東
 神をさく荒く海音の太太根 栖堂
 二の膳やさく——吹くむ細の鼻 子珊
 東やさくやさく——戸をさくさくをね 濁子

下徳田村三郎

高野新屋をさくさく——柱の如く 千那
 声の如くをさくも鳴く人鶴船 越人
 風——二日の月をさくさく—— 若守
 出待日や如き色くすむ作勢の海 園友
 八重の葉をさくをさく—— 杜園
 かけゆや水田のうへ乃ての川 惟然
 馬うりさくかけ田里ややう時 乙列
 門の家の小窓もさくさく—— 允兆
 廣津やさくさく—— 浪太郎 史邦

さね麻のうさありふせる枯柳ふ	大芳
菱花のりりり川流やほろきに	本節
山さくちや小川のあふふ	智存
あゝ溪や何れも深ふふささ	若良
冷汁とむえとささささ杜若	沾圃
日の星やこころのつぎ牛の舌	正秀
麦食し一層と思ふとさささ	理有
衣ふや白さハおとさの流る	路通
粟糠や庭よりさささの秋	前川

あゝさささ又松風のさささ	小枝
菽垣や馬のうほく桃乃死	孤屋
さ入るさささささささ	曲翠
十の日を月や睦月の古き	之道
麻のささささささ	素龍
ささささささささ	仙化
名月や初よりさささ	如行
名月や初よりさささ	不玉
菽疇や穂麦よりさささ	荊口

山の端をちう々顔あり春の月 魯町

蓮れ夢やんりくあはれ水もかき 白雲

けしめぬを懐れもけしき柳か ト宅

我翁く月れよ思せり望月の歌 素堂

右軍八章ハ翁の言身旧友なりあき
芭蕉菴再興乃縁みゆきむしを今
在くくくくくくくくくくくく

四時混雜

薄綿も紗もる花よ衣の天府

五なり一の鳥や年月の轉云婆心

雪とくんえてき竹のをさうか松風

山吹や濃くよこく流ゆく綿衣

雛の尾れくくくくくく焼餅代竹翁

仍喜や志きりくくくの阿し山 桃鏡

ちるおり果たうと海の湧か 芳堂

いあゝ人丸の目もさる因うれ 楚水
 致仕——の形もさる紙子非 画鏡
 作るる富士の白ひや菊の霜 友路
 早よ帰る縋もや浪のそり船 白起
 それと年月を初るや都云 百貫
 常や離の冠を忘る人 乳母
 夕立や長柄さるる人ハ武士 松隣
 早——花舟追海、寐るるか 花明
 白きや月色の駒よ来乃鞍 如風

悔つぬ世帯けを——後の月 快車
 鞍下かの馬さる對をや花の雲 是物
 澁枯る氷をつつふこほりか 鬼守
 来——そ思ふつうくふ——きた 富屋
 川より流るる君のあ——かか 風扇
 年波や鏡の光をぬく——も 茶室
 炭賣や消へ——てハ君の声 花口
 名月やさ——波かき——つ 三思
 君もさ——忘ぬるやおろろ月 祖山

笹の葉よつとる音あり秋の香 風足
 不^しき^くに曉乳をたつ^り 白門
 合歡の葉い^まい^さめや^に 急長
 う^さき^やの^い合の^るより 熟^と 葉経
 阿^ゝ海^はを^う一本の^鯉の^卵 長羽
 草も木と化る^おか^ー^うの^月 千之
 花の^心又^雲ふ^ー^と 女 共^あ
 動^るの^ちう^ー^と 秋の^香見^うか^へ 風大

初^ちち^よは^霜は^てて^る 阿^ゝ^と 千^年
 ち^よの^心を^う^とや^うの^月 吏^中
 ち^よの^心を^う^との^目を^あ 海^川
 将^所の^馬と^めあり 清^水 陰 園^半

さ^むし^と紙^様は^志る^ぬ 祇^卜
 ち^よの^心を^う^との^目を^あ 尚^美
 志^うの^心を^う^との^目を^あ 湖^名
 方^丈の^心を^う^との^目を^あ 香^凍

村取よ矢継子あり即ちきん 貞五

白くく九桃灯や今朝のあき 伴條

本唱せし月夜のきり郭云 赤月

梅咲や草紙本枯る乃終月 葵人

客より先被く花袖うか 冬扇

山吹や花ちりく馬さじ布 牛家

藤や水の家庭の花さうり 玉斧

人新母石く成るる小鮎うか 為昇

山越く花のあふくこのやこうか 翠葉

逢刃ての後も森くく郭公 言彦

か一首さすり出く大楠が 一得

雲をゆるるるく成り郭云 起石

名およくく出る月夜が 去鉤

或時を門にうせて葵うか 千丈

星うつり夜度の春く花の山 和星

顔よちく糸風の家や後の月 盤中

投入る者もつゝ牡丹の種	西考
川橋やをさう橋よ六七騎	免明
郭公おゝひさのふ二日の月	依國
十月七日花さや初橋	倉胤
庭戸忘や壁ふも昔の枯る時	稻牛
南燭の冥やけ比の店の花	大斗
白咽や月待露枯る調子	左衛門
ちる時や帯のつゝぬ橋式	桃稚
さ川音や大事よある於小舟	美人

郭公様つゝふくさつりりり	援言
くはあわの一葉あつゝ氷の貢	深松

志く所や時めく法のつゝり花	五葉
海苔の香や炙るあゝのふより	斗水
ふ菊や玉てふ家も咲日さる	子真
雪の音森といやー梅	汀雨
うゝひさや若葉柳のますき	子葉
さむしる舟炭火の灯や梅花	五葉

雪や改小悟うりー藪かう

孫光

嘘つゝぬ里もるゝり山はく

源光

田園

老を啼きをうゝゝねを

口

茶汁

たつ子入夢のうゝや

かみ上り山

投茶

月晴くふゝ紙なり

張府連

年得

面白や菊かんーもきのう

金龜

残する菊かんつけあり

元子

途あるを追くゝて月見

格泉

侍意も短靴ハかー

奇峰

川ぬけも大根煮ー

松柯

志くきやつりくゝて

荒振

顔見せや菊煮くゝ

下張井内

江

河豚汁や自問自答の

口ミツ系

巴

降きと相くゝ

巴

菱くゝ

口府

玉

初馬や襟くゝ

武蔵系

系

うれー

口府

蓮

帯とさしぬぬ恋なり都云 宿氣

春を我より月や日傘 石念

名月やさうしとて井の奥 求光

名月や神山の歌を己若按 雷堂

強食あり

屋敷に月持ぬ紫山子もふり危 乙兒

かゝる日はあつたれ花のちるるを 人花

藤らとぬを氷とためさる秋の月 盤古

下陰をぬきふむなりうへと念 吐丹

去はる去は藤くまん花の陰 六念

春の日や之井の古寺鐘はあきて 連文

神ありかきあさる紫山子我 魚波

海棠や面戸もくく次なる声 山幸

空に川浮世の雲のいなりうね 文素

さうね降をねとありぬ初さう 青雨

うせあへる節と節く周乃藤 周作

芭蕉菴寄附料并句到來國々

山城系連中

振津大坂連中

伊勢山日連中

伊賀上野連中

丹後浪崎連中

丹後杵築連中

佐中笠原連中

佐後福山連中

吉原小倉連中

筑前福志連中

阿波連中

大佐連中

大佐中村連中

尾張名古屋連中

岡崎海平倉連

尾張星勝連中

岡大鷹連中

名古屋連中

駿河連中

伊豆之橋連中

岡江名連中

伊豆吉田連中

岡大仁連中

岡立地連中

相模小田原連中

武蔵赤岩連中

岡忍石連中

同袋山連中

同川友連中

上総高根連中

同家津連中

同川名連中

同八幡連中

同平田連中

同地乞連中

下総行内連中

同小見連中

同隣系連中

同方力連中

常陸龍崎連中

同江戸崎連中

同東平井連中

上野茂呂連中

同飯林連中

同古橋連中

同吉井連中

下野枳木連中

同所連中

同平田連中

陸奥仙臺連中

同會津連中

同棚倉連中

同福徳連中

同二本松連中

同八町ノ目連中

同南郷連中

出羽上山連中

同酒田連中

同松山連中

越後堀内連中

同十日町連中

同塩沢連中

武江連中

右所々のおりてハ幸并句、芭蕉堂ニ納之白
ち紙後編の彫刻多し人々をみまふす

法是くのみ紙とけよ名の響

東武

彫工

啄梓



雪中庵俳書目録

書林西村文刻堂藏

續五色墨

竹阿 宗瑞 素九 秋象 兼之

續百書句合

馬光評 史宅

きんしゃう百負

吉原撰

芭蕉菴再興集

兼太編

新笈引集

山幸撰

新れ集

桃祖撰

附合小鏡

牛家著

三春日記

兼太述

玄砂子歌

兼成 子交 著

画のこゝろ

近刻 山幸撰

或時百負

近刻 吏中著

其角文集

近刻 兼太撰

芭蕉翁附合集

兼太撰

及川了庵たふん

近刻

住吉千勺

一冊 兼太 吐月 夜危

蓮花舎

三冊 兼太撰

秋山家

夜卷撰

嵐雪齋句集

全三冊

史登世齋句集

全一冊

夢太翁句集

增補 全二冊

志一 枕

曲川翁句
近長哥仙

小窓齋句集

中房
社中

